

文部科学省科学研究費基盤研究 (B)

「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」

キックオフシンポジウム

不破関と

西濃の古代

2023年3月11日(土) 13:00～17:00

関ヶ原町歴史民俗学習館

主催：名古屋大学考古学研究室・関ヶ原町

文部科学省科学研究費基盤研究 (B)
「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」
キックオフシンポジウム

「不破関と西濃の古代」

日程：令和5年3月11日（土）13:00～17:00

会場：関ヶ原町歴史民俗学習館

次 第

- 13:00 【開会あいさつ】関ヶ原町長 西脇康世
- 13:10 【趣旨説明】梶原義実（研究代表者 名古屋大学大学院教授）
- 13:20 【基調講演】「古代の関と交通」馬場 基（奈良文化財研究所）・・・1
- 14:00 【報告1】「不破郡における終末期古墳の歴史的意義
—綾戸古墳と南大塚の再評価—」
中井正幸（岐阜聖徳学園大学）……………9
- 14:20 （休 憩）
- 14:40 【報告2】「不破関の過去の調査と今後の調査計画」
梶原義実（名古屋大学）……………15
- 15:00 【報告3】「不破関・西美濃地域と名古屋大学所蔵史料」
古尾谷知浩（名古屋大学）……………21
- 15:20 【報告4】「情報技術をもちいた文化財の社会活用」
遠藤 守（名古屋大学）……………25
- 15:40 （休 憩）
- 16:00 【シンポジウム】「不破関と西濃の古代」
司会 三舟隆之（東京医療保健大学）
パネリスト 馬場 基、中井正幸、梶原義実
古尾谷知浩、遠藤 守
- 17:00 【閉会】

文部科学省科学研究費基盤研究（B）
「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」
（研究代表者：梶原義実）
キックオフシンポジウム「不破関と西濃の古代」

古代の関と交通

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部
平城地区史料研究室長 馬場基

1 古代国家が「関」を必要とした理由

日本古代国家の道普請
道の利便性・危険性

2 関に期待された役割

交通のコントロール
直轄軍事施設としての関

3 不破関の理由

一目瞭然壬申の乱
海陸の接点

4 不破関の影響（予察）

強烈な「直轄」の記憶

※主要で見つけやすそうな参考文献

市大樹『すべての道は平城京へ』吉川弘文館、2011。

近江俊秀『日本の古代道路 道路は社会をどう変えたのか』角川書店、2014。

『駅家と在地社会』奈良文化財研究所、2004。

史料1 軍防令54置関条

史料3 職員令70大國条

54 凡置^{*}関^{*}應^{*}守固^{*}者。並置配^{*}兵士。分番上下。其三関者。設^{*}鼓吹軍器。國司

分當守固。所^{*}配兵士之數。依^{*}別式^{*}。

凡そ関置きて守固すべくは、並に置きて兵士を配し、分番して上下せよ。其れ三関には、鼓吹、軍器設け、國司分當して守固せよ。配せむ所の兵士の數は、別式に依れ。

史料2 考課令49 関司最条集解

譏察有^{*}方。行人无^{*}擁。爲^{*}關司之最。

謂譏者。問也。關司。謂依軍防令。國司分當守固是也。釋云。譏察有方。廣雅。譏問也。有方。釋見上注。行人无

擁。左傳。道路无^{*}壅。野王案。壅猶塞也。字在土部。陸法言切韻。擁手擁也。擁與壅音相涉。並音於瀧反。關司。謂軍防令國司分當守固也。案目以上也。或釋云。擁壅同音。所以相涉耳。壅障也。朱云。譏察有方者。未知一

端何。古記云。譏。問也。推也。關司。軍防令云。其三國關者。設鼓吹軍器。國司分當守固。所配兵士之數。依別式也。國司謂目以上也。

史料7 関市令10 関門条

10 凡関門。並日出開。日入閉。

凡そ関門は、並に日出でて開け。日入りて閉てよ。

史料8 関市令1 欲度関条義解

関市令第廿七

凡貳拾條

凡欲度。關者皆經本部本司。本部本司。謂本部本貫也。假有大舍人。是京人。而欲度關者。依式造過所。先申本寮寮者。亦經。請過所官司檢勘然後判給還者。連來文。來時過所。而請還時過所。故云連來文也。其依下文。即知未去之間。申牒勘給。若於來文外。更須附者。驗實聽之。日別物運。爲案。若已得過所。有故卅日不去者。其關司准計行程。不過卅日。亦聽過度也。將舊過所申牒改給。若在路有故者。而通計乃滿限者。亦當國官司具狀送關。雖非所部。有來文者亦給。請過所者。雖非是所部。緣其有來文。亦判給之類也。若船筏經關過者。長門及攝津。其餘不請過所者。不在此限。亦請過所。

史料9 公式令22 過所式

22 過所式

其事云云。度某関往某国。

某官位姓。三位以上。称卿。資人。位姓名。年若干。若庶人称本屬。從人。某国某郡某里人姓名年。奴名年。婢名年。其物若干。其毛牝馬牛若干足頭。

年月日 主典位姓名

次官位姓名

右過所式。並令依式具錄。一通。申送所司上。々々勘同。即依式署。一通留爲案。一通判給。

過所式

其の事云云。某の関を度え、其の国に往くといへ。

某の官位姓。三位以上は、卿称せよ。資人、位姓名。年若干。若し庶人は本屬称せよ。

從人ならば、某れの国某れの郡某れの里の人姓名年。奴の名年、婢の名年。其の物若干。

其の毛の牝馬牛若干の足頭。

年月日 主典位姓名

次官位姓名

右の過所式は、並に式に依りて具に二通録し、所司に申し送らしむ。所司勘ふるに同せば、即ち式に依りて署せよ。一通は留めて案と爲よ。一通は判り給へ。

史料10 公式令43 諸国給鈴条

史料13 『続日本紀』養老五年十二月己卯条

史料11 後宮職員令5 蔵司条

史料12 軍防令48 帳内条

48 凡帳内。取_二六位以下子及庶人_一為之。其資人不得_レ取_二内八位以上子_一。唯充_二職分者_一。並不_レ得_レ取_二三関及大宰部内_一。陸奥。石城。石背。越中。越後国人。凡そ帳内には、六位以下の子及び庶人を取りて為よ。其れ資人には、内八位以上の子を取ること得じ。唯し職分に充てむは聽せ。並に三関及び大宰の部内、陸奥、石城、石背、越中、越後の国の人を取ること得じ。

固関(一〇五頁注一八) 続紀において大葬以外では、長屋王の変(天平元年二月辛未条)、惠美押勝の乱(天平宝字八年九月乙巳条)、称徳天皇の行幸(天平神護元年十月庚申条)、光仁不豫(天心元年四月己丑朔条)、水上川継の謀反(延暦元年閏正月甲子条)の際の固関が知られる。大葬や変事に遭った時の戒嚴措置であるが、三関が三関国の国府より近京の地に位置していることから岸俊男は、京師に叛乱がおきた時、その逆謀者が東国へ逃入し、そこを拠点に反撃するような事態を未然に防ぐことを意図していたと考えている(『元明太上天皇の崩御』『日本古代政治史研究』)。かつて壬申の乱において東国の兵を動員した大海人皇子が近江朝廷方を破り、山背大兄王・惠美押勝・平城上皇などが東国に拠点を求めようとした事実からみて、岸説は首肯されよう。

○乙酉、先是、

伊勢・美濃等関、例上下飛駅函、関司必開見。至是、
勅、自今以後、不得輒開焉。

○乙酉、是より先、

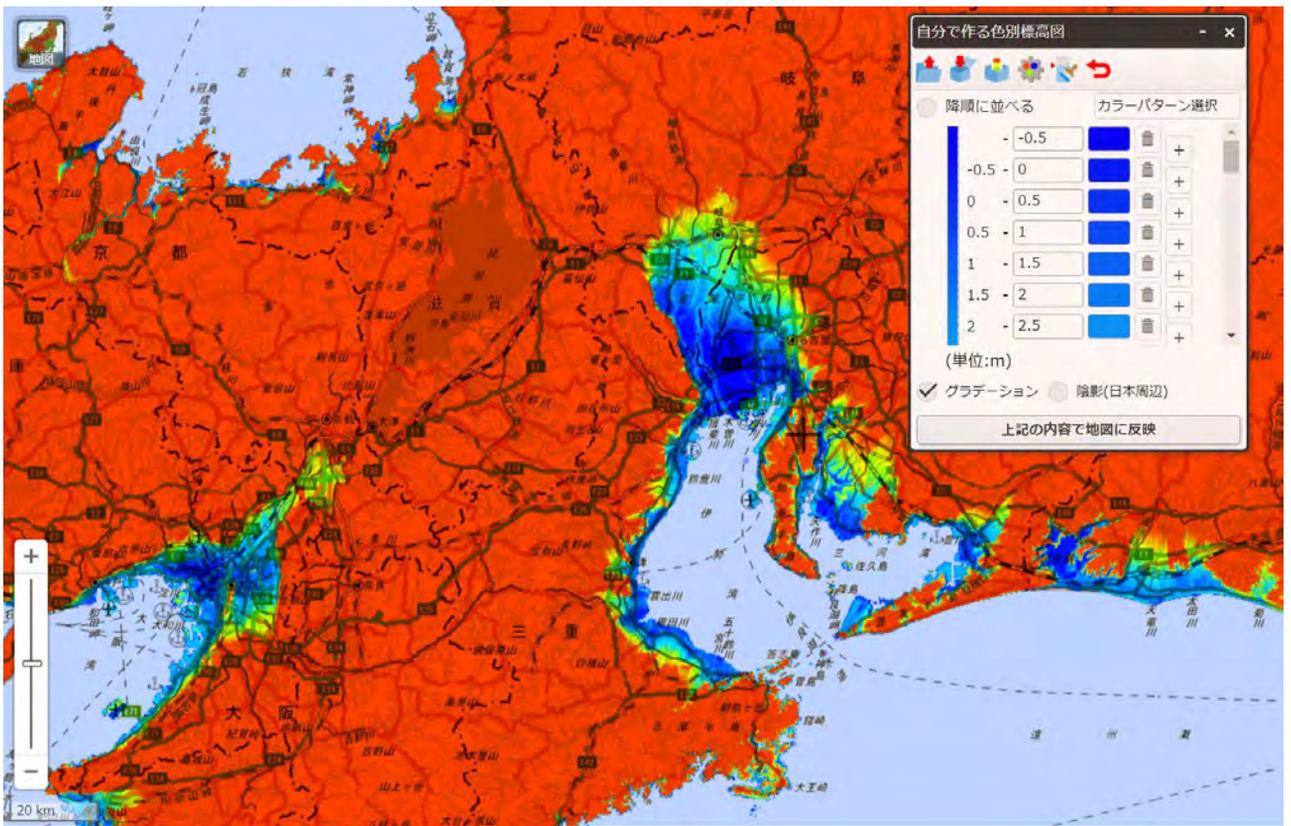
伊勢・美濃等の関、例として上下の飛駅の函を関司必ず開き見き。是に至りて、勅して、今より以後、輒くは開くこと得ざらしめたまふ。

○甲寅、

勅伊勢・美濃・越前等国曰、置関之設、本備非常。今正朔所施、区宇無外。徒設関険、勿用防禦、遂使下中外隔絶、既失通利之便、公私往来、每致稽留之苦。無利益時務、有切民憂。思革前弊、以適交通。宜下其二国之関、一切停廢、所有兵器・粮糒、運收於国府、自外館舎、移建於便郡上矣。

○甲寅、伊勢・美濃・越前等の国に勅して曰はく、「関

を置く設は、本、非常に備ふ。今正朔の施す所、区宇無外なり。徒に関険を設けて防禦を用ゐること勿く、遂に中外隔絶して、既に通利の便を失ひ、公私の往来、毎に稽留の苦を致さしむ。時務に益無くして民の憂に切なること有り。思ふに、前の弊を革めて以て交通に適せむことを。その三国の関は一切に停め廢めて、有てる兵器・粮糒は国府に運び収め、自外の館舎は便郡に移し建つべし」とのたまふ。



→平城宮発掘調査出土木簡概報6 7頁上段
 ↓伊場遺跡(静岡県浜松市)出土30号木簡



不破郡における終末期古墳の歴史的意義

—綾戸古墳と南大塚古墳の再評価—

中井正幸（岐阜聖徳学園大学 非常勤講師）

1 古墳からの古代史視座

前方後円墳の終焉以降を古墳時代でも終末期とされるなか、不破では6世紀末から7世紀前半にかけて綾戸古墳や南大塚古墳の円墳や方墳が築造されたほか、中小の古墳群が7世紀後半まで造営された。横穴式石室への追葬行為や墓前祭祀を考えれば、古墳は8世紀前後まで祖先墓として認識されていた可能性がある。そのため宮代廃寺が建立された頃はまだ古墳は墓制としての機能を維持していたと考えられ、寺院と古墳を切り離すのではなく林立した地域動態を考えていく必要がある。

ところで、古墳は「見える政治的墳墓」として当時の主要な交通網を意識した墓域に築造されたと考えられるが、不破では垂井南部と北部、そして赤坂・昼飯の三箇所に造墓地が集中する。垂井南部では伊勢から近江に、垂井北部と赤坂・昼飯は東西を往来するルート上に営まれており、人々や物資が交差する拠点にもなった。こうした古墳の造墓地（墓域）を新たな視点に加えることで、関が設置されていく歴史的経緯が浮かび上がる。

この頃「群集墳」と呼ばれる新たな造墓活動が赤坂金生山一帯や池田山山麓で展開するが、数百基単位の古墳群の遍在性は大型方墳の造営や横穴式石室にみる斉一性とも軌を一にする現象であり、それはまた同時にのちの東山道ルートを意識した交通網の整備という地方政策にも通じると考えられる。

今回の不破関研究に対して古墳研究が果たすことのできる役割はこうした視座によるものであるが、さらに共同研究という枠組みのなかで不破の地の歴史的動態を明らかにしたい。

2 再検討するおもな古墳

(1) 資料化する終末期古墳（垂井町）

古墳名（墳形）	規模・築造時期	埋葬施設	調査内容および項目
南大塚古墳 （方墳） 1968年調査	一辺25m、高さ約6m 7世紀前半	横穴式石室 全長15.3m *前庭部含む	墳丘再測量 横穴式石室の再実測 出土遺物の実測
兜塚古墳 （円墳） 1964年調査	直径約35m 6世紀末	横穴式石室 全長11.2m	【消滅墳】 出土遺物の実測
綾戸古墳 （円墳）	直径約40m、高さ約6m 周溝幅8～11m 6世紀末～7世紀初	不明	墳丘測量

(2) これまでに資料化された終末期古墳（大垣市）

古墳名（墳形）	規模・築造時期	埋葬施設	調査内容および項目
車塚古墳 （方墳？） 2008年調査	一辺24m （円墳） 7世紀前半	横穴式石室 全長13m以上 *前庭部含む	1877年（明治10）に出土した 出土遺物の実測
寺前1号墳 （円墳？） 1972年発見	不明 7世紀中葉	横穴式石室 剝拔式石棺	【消滅墳】

表1 対象とするおもな古墳と内容

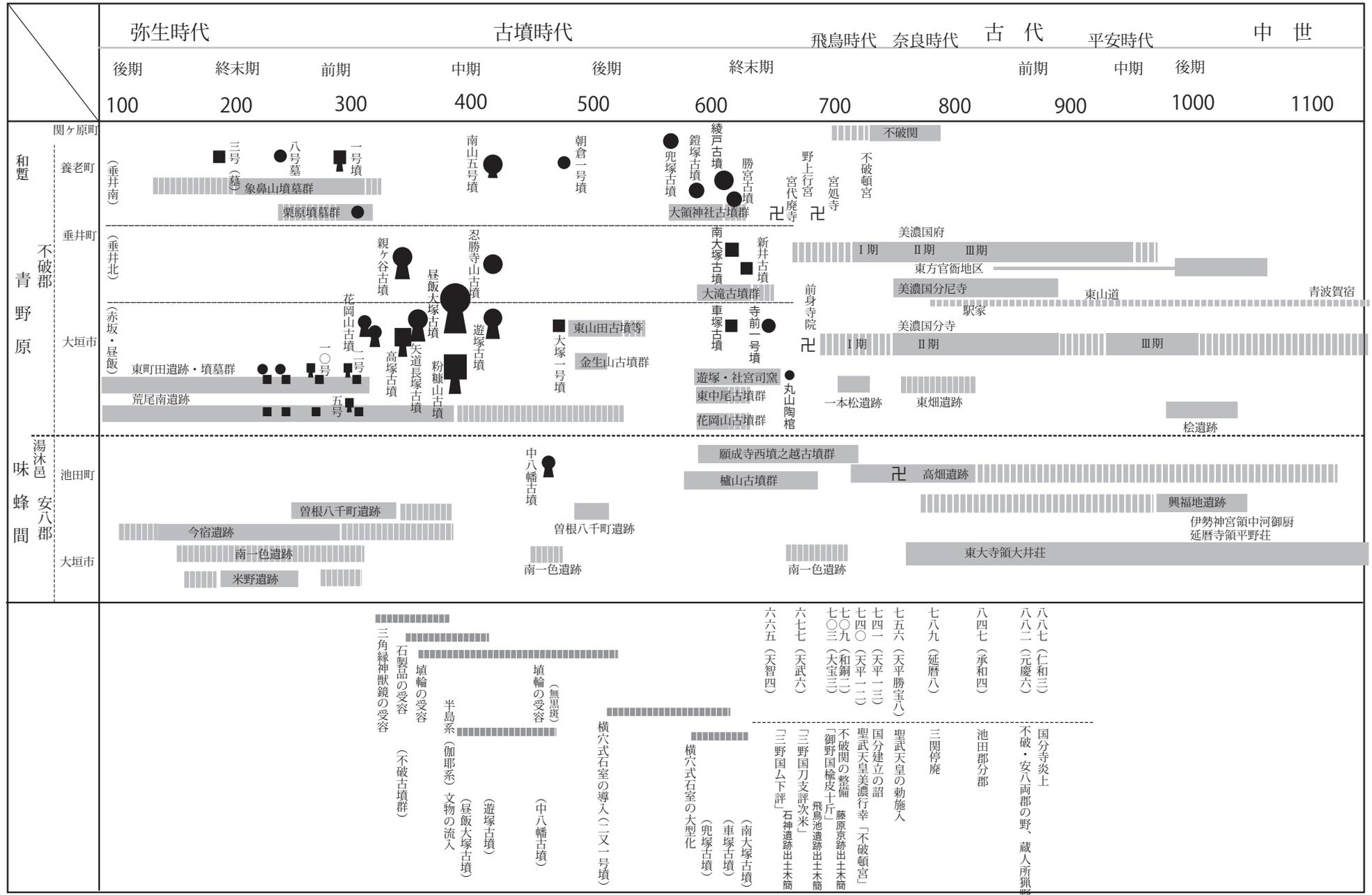


表2 相川流域および揖斐川流域におけるおもな歴史事象

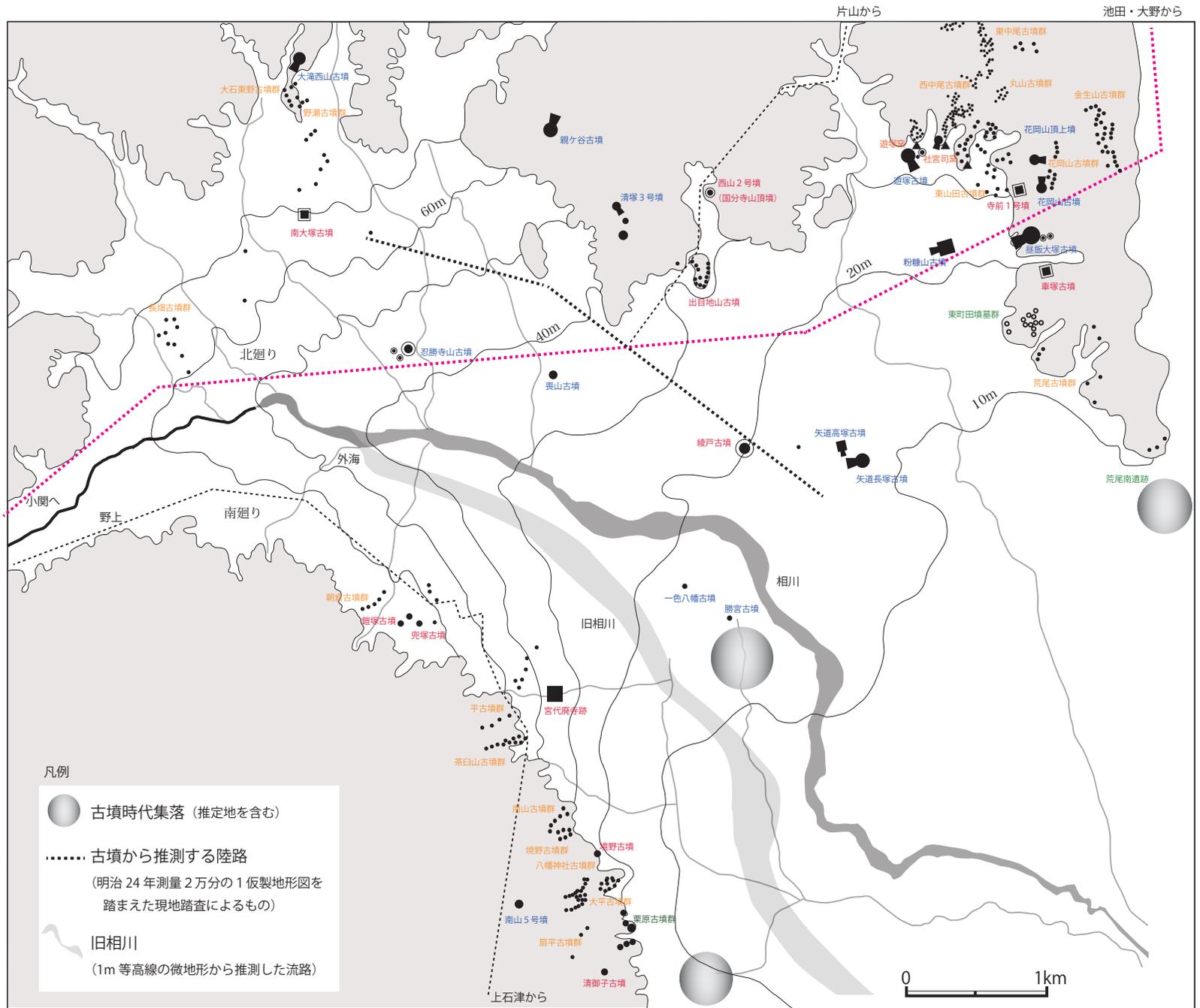


図1 相川流域および旧揖斐川右岸の古墳分布と想定される交通路

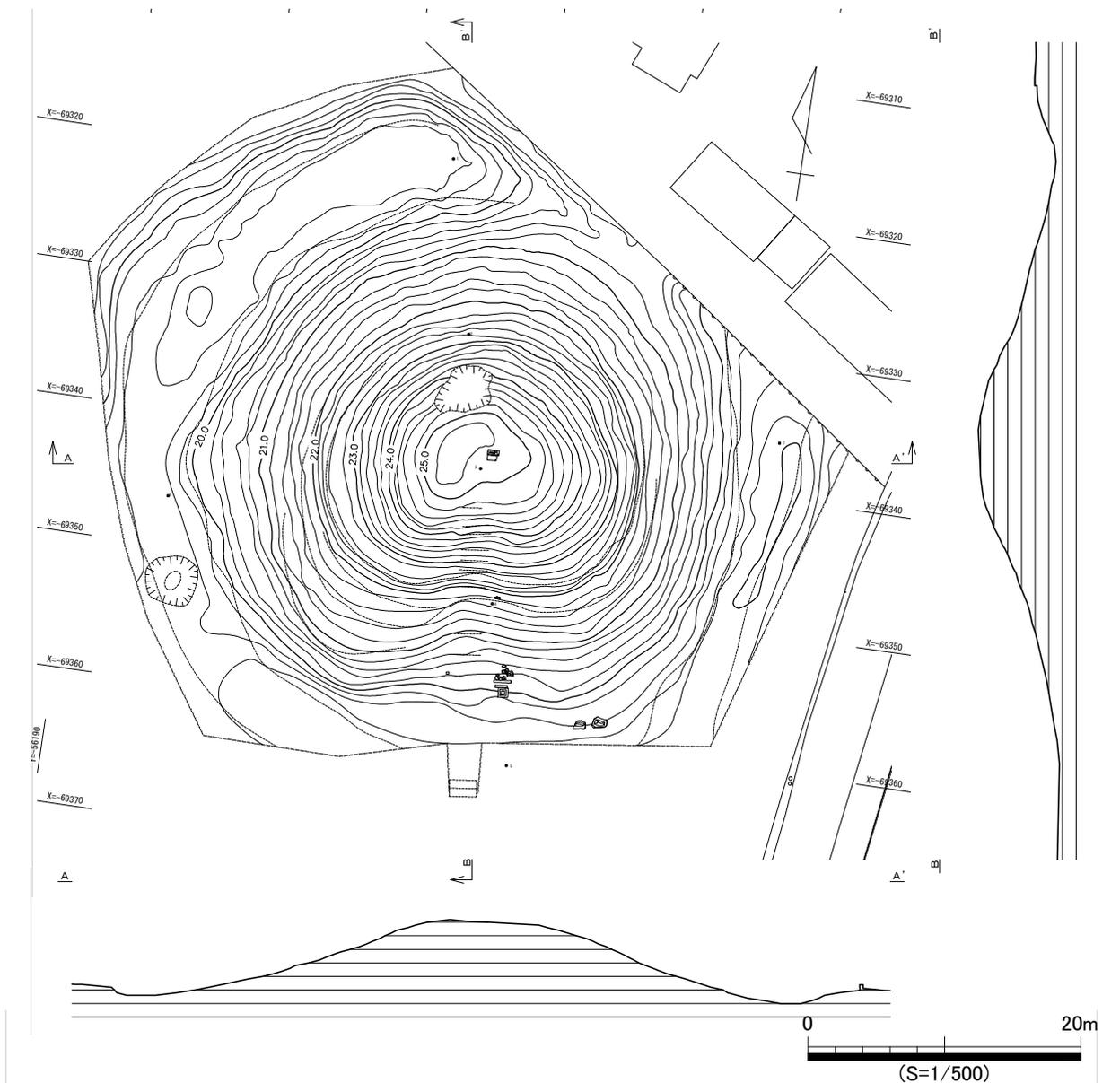


図2 綾戸古墳墳丘測量図（平板図）

研究史

本墳は大正から昭和にかけて小川栄一により略測、それまで方墳（藤井 1926）とされていたのを「美濃国円形古墳」（小川 1931）にて「径二十間、幅四間の隍」をもつ円墳とした。のち「直径二十二間、直高二丈一尺」と修正している（小川 1940）。後出の報告では墳丘から露出した石を横穴式石室の羨道の一部として記録にとどめている。

測量成果

直径約 40m、高さ 6.1 m、三段築成となる大型の円墳で、周溝の幅は約 10～11 m、深さ 1.1～1.7 m となる。本数値は『小川調書』に記載されたものと比べても、周溝の底が当時より堆積していることを考慮すればほぼ同一といえる。

墳丘には川原石の葺石が認められ、周囲にはかつての周溝の痕跡をとどめている。周溝は北側で一部埋められているものの、戦前の空中写真などから全周していたと思われる。本墳は墳丘の形状や過去に出土した三足壺などからみて終末期古墳と考えられ、その規模は東海地方でも最大級と評価できる。

参考文献

- 藤井治左衛門 1926 「本郡の後期古墳」『不破郡史』 不破郡教育会
- 小川栄一 1931 『郷土研究資料』 第2号 岐阜縣師範學校郷土研究室
- 小川栄一 1940 「綾戸古墳」『岐阜縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』 第9輯 岐阜縣
- 松居良晃 1990 「岐阜県不破郡綾戸古墳出土特殊須恵器（三足壺）について」『大垣市埋蔵文化財調査概要—昭和63年度—』 大垣市教育委員会

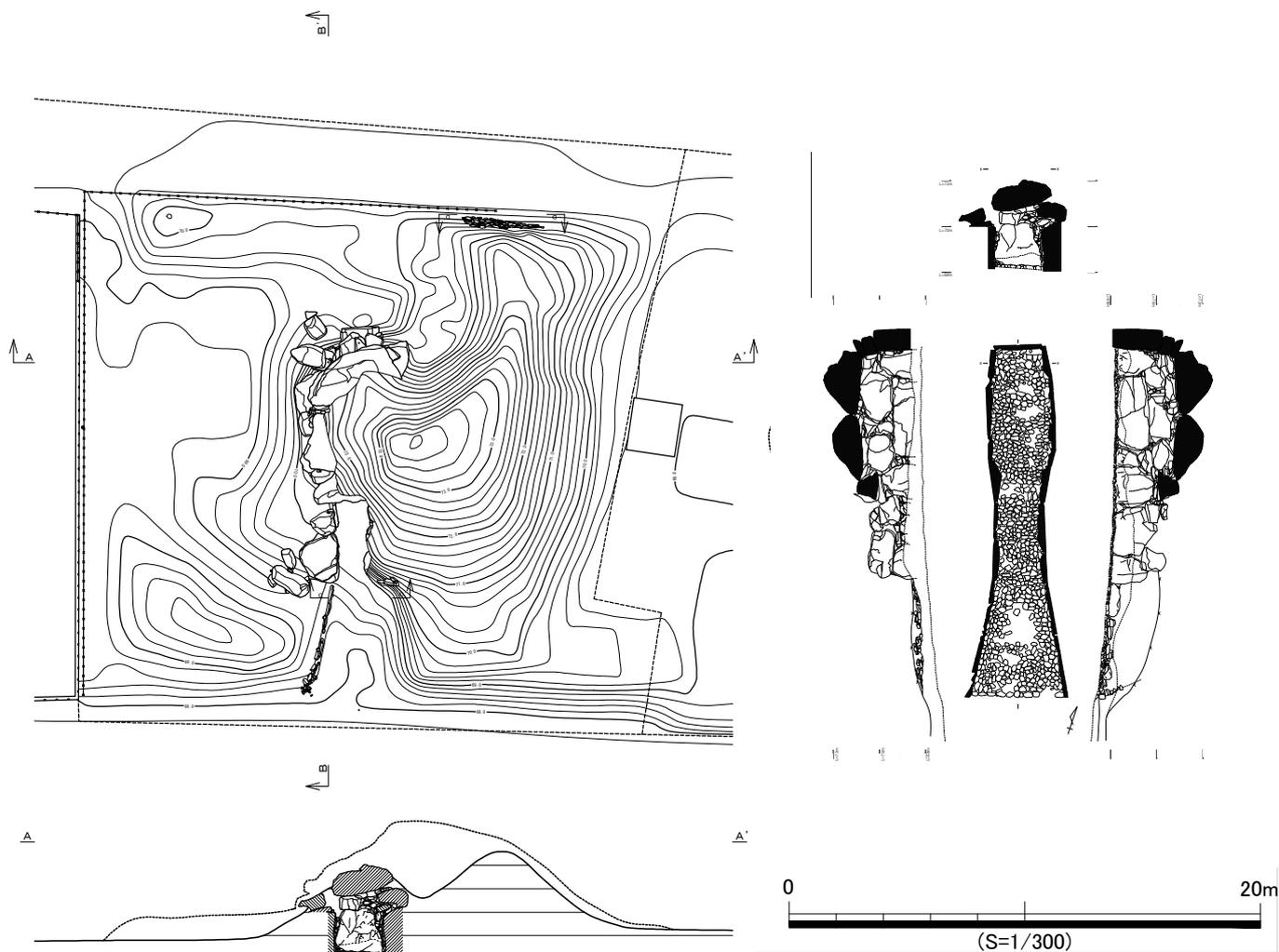


図3 南大塚古墳墳丘測量図（再測量図）および石室実測図（過去図との合成）

研究史

本墳は1968年（昭和43）、道路工事の土取りによって石室が露出した古墳で、当時北西の「大塚」に対して「大塚南」とも呼ばれた。このとき名古屋大学考古学研究室により緊急調査が実施され、墳丘には貼石状の葺石が、横穴式石室の床面からは須恵器、土師器、鉄鏃や馬具片が確認された。その後墳丘図と石室図は『垂井町史』に掲載され、7世紀の大型方墳と評価されている（垂井町1969）。なお出土遺物は垂井町に移管されて遺物の一部は公表されている（垂井町2020）。

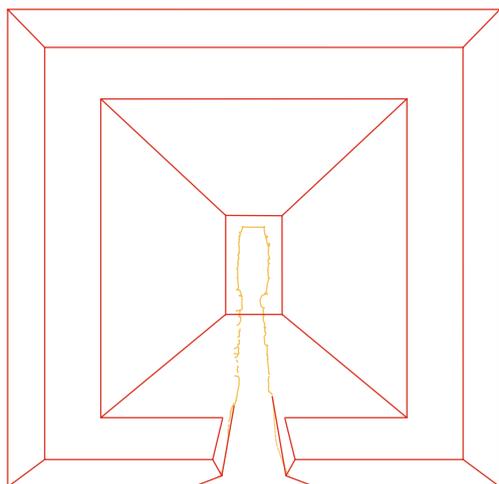
測量成果

古墳は墳丘上段と前面側下段の一部が遺存する二段築成の方墳と判断できるものの、墳丘西側が発見当時のままで大きく欠損している。墳丘下段に位置する石室前庭部を基準にした規模は一辺25m、高さ6mとなるが、東西および北側の墳丘下段が埋もれているため正確ではない。調査ときに確認された「周囲に幅約5メートルの濠の痕跡」は観察できなかったものの、貼石状の葺石を確認することができた。横穴式石室の測量は新たに右側壁を加えたものの、床面に堆積した土砂のため下段部分は過去図を合成している。築造時期は出土土器などから7世紀前半の築造と考えられ、前庭部を含めた石室の全長が15.5mとなる美濃最大の横穴式石室を有する方墳という評価は変わらない。

参考文献

- 垂井町1969『垂井町史』通史編（1968年4月 名古屋大学文学部考古学研究室測量とする折込の実測図有）
- 檜崎彰一1972「古墳時代」『岐阜県史』通史編原始
- 垂井町教育委員会2020『垂井町遺跡詳細分布調査報告書（2）』

【補記】 綾戸古墳および南大塚古墳の測量調査の実施にあたっては、垂井町教育委員会、地元自治会（保存会）ならびに土地所有者各位の格別なる御配慮と御協力をいただいた。また綾戸古墳の測量は名古屋大学考古学研究室のみならず、本研究代表の梶原義実教授の呼びかけにより南山大学上峯篤史准教授と滋賀県立大学金宇大准教授の指導のもと、複数の大学院生や学部学生らが加わっての合同調査であったことを報告しておきたい。なお、両古墳の測量図は研究をともに進める（株）イビソクのもとで調製が図られ、掲載図は最終報告までの中間報告である。



(復元ラインは火塚古墳の推定復元図を重ねたもの) 0 5m

8

古墳を方墳として復元した場合は一辺24mとなり、その推定ラインは火塚古墳(坂祝町)と近似する。横穴式石室は露出部分で約8mで、前庭部を含めれば13m以上となる大型の石室である。

図4 車塚古墳(大垣市昼飯町)の墳丘および石室(天井石)と出土遺物 ▲大垣市2011「車塚古墳」『大垣市史 考古編』

▲瀬川貴文2005「岐阜県大垣市寺前1号墳出土石棺と濃尾の家形石棺」『考古学フォーラム』17

図5 寺前1号墳(大垣市昼飯町)の発見時と保管された家形石棺



図6 丸山出土の陶棺(大垣市昼飯町)とその類例

▲中井正幸2004「古墳終末の様相―岐阜県大垣市丸山出土の長胴棺をめぐる―」『かにかくに 八賀晋先生古稀記念論文集』

不破関の過去の調査と今後の調査計画

梶原 義実（名古屋大学）

はじめに：不破関とは

1. 不破関の発掘調査（富田 2017 より）

1974 年から岐阜県教育委員会による発掘調査が実施される。

外郭土塁：北限 460.5m、東限 432.2m、南限 112.5 m

台形状の土塁で、西側は藤古川との比高差で関の範囲が画されていたか？

東限土塁基底部から、和銅開珎3枚を埋納した土師器甕1個と須恵器蓋が出土。

遺物から土塁の築造は8世紀中頃

内郭築地：基底部と石敷（雨落か？）。瓦が多く出土しており、瓦葺。

掘立柱建物：

政庁部：SB302（柱間 2.4m）・SB301（柱間 3.6m）と
SB401（柱間 2.7m）が確認。

平瓦の堆積がみられることから、一部は瓦葺か？

望楼：南西部・北東部にそれぞれ六角形状の望楼（柱間約3m）

出土遺物：川原寺式軒丸瓦をはじめ数種の軒瓦や須恵器・灰釉陶器などが出土。

2. 残された課題

1) 中枢部（政庁）の構造が不明

中枢部は限定的な面積の調査に留まり、掘立柱建物数棟が確認されるのみ。

建物構造やその時期的変遷について、十分な知見が得られていない。

関の機能や、関内部の施設でなにがおこなわれたのかという、

古代交通史における課題を解決するには、内部構造の確定が必須である。

2) 関の設置年代についての知見が不十分

出土した川原寺式軒丸瓦の年代から、天武朝～7世紀末頃に遡らせる見解。

川原寺式瓦の美濃地域での展開から、その年代観を再考する必要。

丸平瓦には古手のものがほとんどなく、転用の可能性。

ちなみに、出土須恵器は8世紀中葉以降のものが中心。

3) 関の諸施設の造営順序についての検討が不十分

現在、既調査出土の丸平瓦の分布を検討中。

築地塀と内郭内で、出土瓦の傾向が異なる可能性。

平城宮式・美濃国分寺式瓦との対応関係を検討する必要。

4) 関の範囲や構造について再検討できる可能性

関ヶ原町による分布調査：関の東側にも須恵器が集中して採集できる地点。
関の東側に存在する不自然な高まりや、周囲と異なる南北ベルト状の土地利用
伊勢街道の位置や、北国街道から「小関」を通過して南に向かう旧道
⇒ 不破関の位置で東西道（東山道）と南北道が「衢」を形成？
関の範囲として、現在の長辺1町の台形状の土塁範囲としてよいのか要検討。

3. 今回の調査計画

2023年度：内郭築地塀南西隅の調査

既調査においてもトレンチが設定され、築地塀の基底部の一部および瓦が出土。
今回追加調査を実施することで、築地全体の構造や築地幅を確定し、
また出土瓦の検討をおこなうことで、築地塀の建造年代を確定することができる。

2024年度～2026年度：

現在検討中だが、中枢部の調査および、関の東側に調査区を設定することも考えている。
外郭土塁の調査：土塁か築地塀か？

不破関周辺地域の測量調査

関周辺の地形や土塁等の状況について、ドローンや赤色立体図などを持ちいた
最新の測量技術で調査をおこない、関の全体像を把握する。

おわりに

主要参考文献

梶原義実 2016「東海道・東山道の国分寺瓦（1）一尾張・美濃国分寺について」『日本古代考古学論集』

岐阜県教育委員会 1978『美濃不破関』

小林新平 2014「美濃地域における古代寺院の展開：川原寺式軒丸瓦を中心として」『メタプティヒアカ：名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』8

関ヶ原町 1990『関ヶ原町史 通史編 上巻』

富田真一郎 2017「不破関の再検討」

中川尚子 2001「不破郡における古代軒瓦」『平成11年度タリイピアセンター歴史民俗資料館報』

八賀晋 1973「地方寺院の成立と歴史的背景—美濃の川原寺式瓦の分布—」『考古学研究』20-1

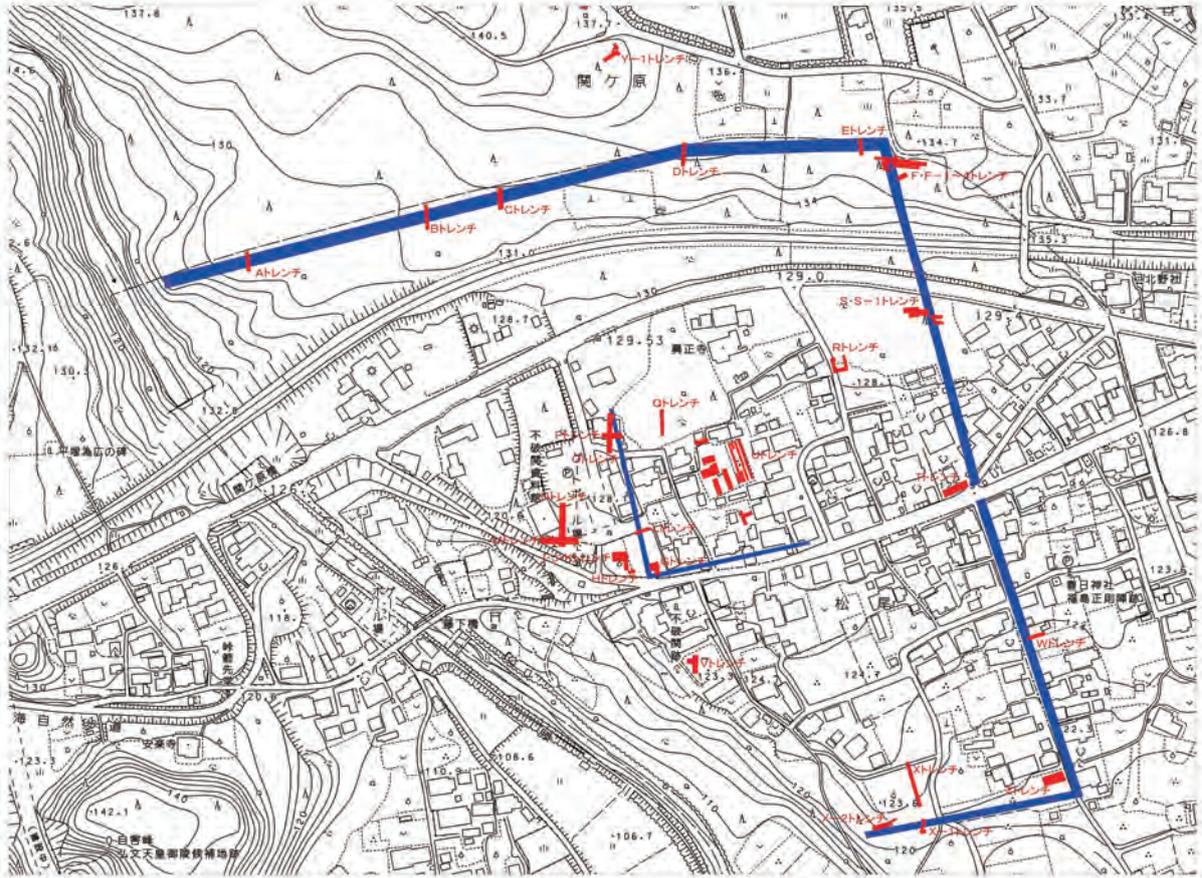


図1 不破関全体図と発掘調査地点（関ヶ原町提供）

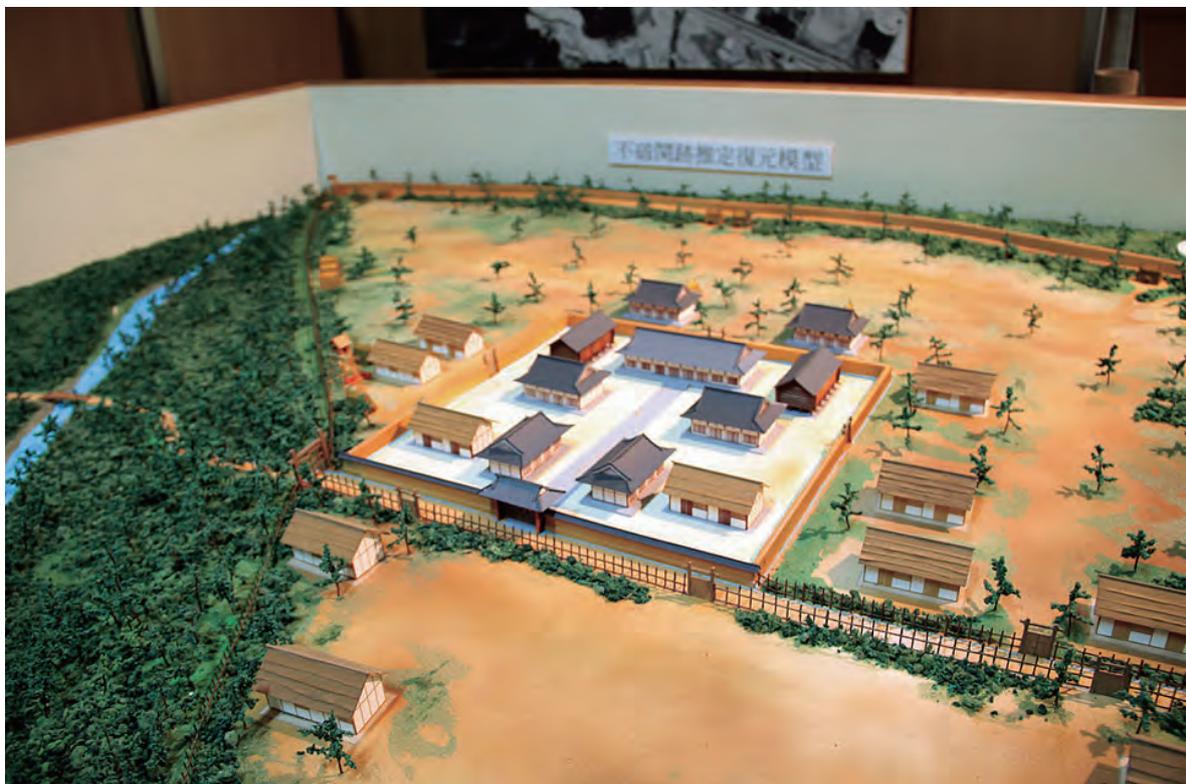
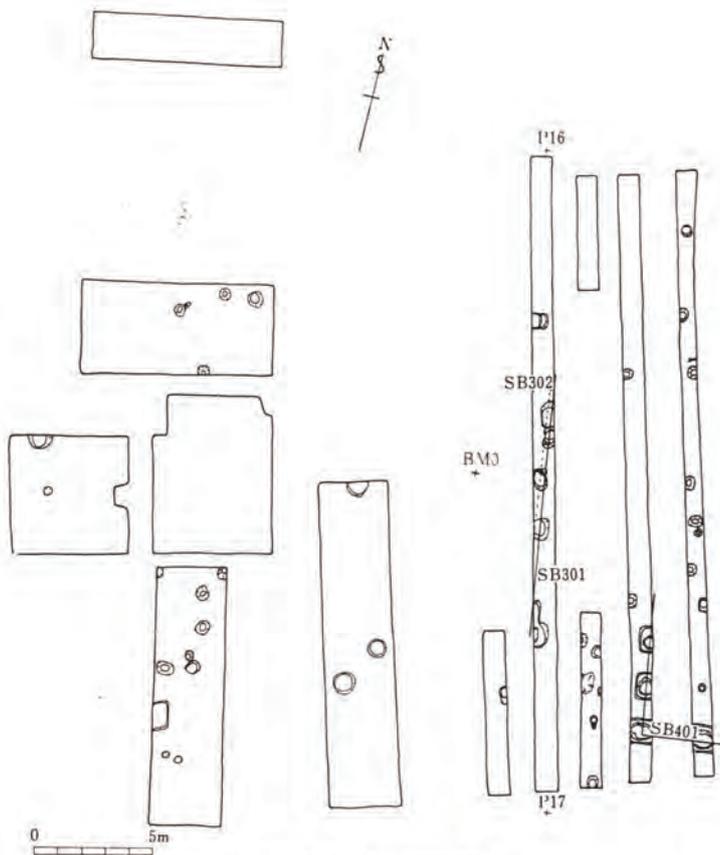
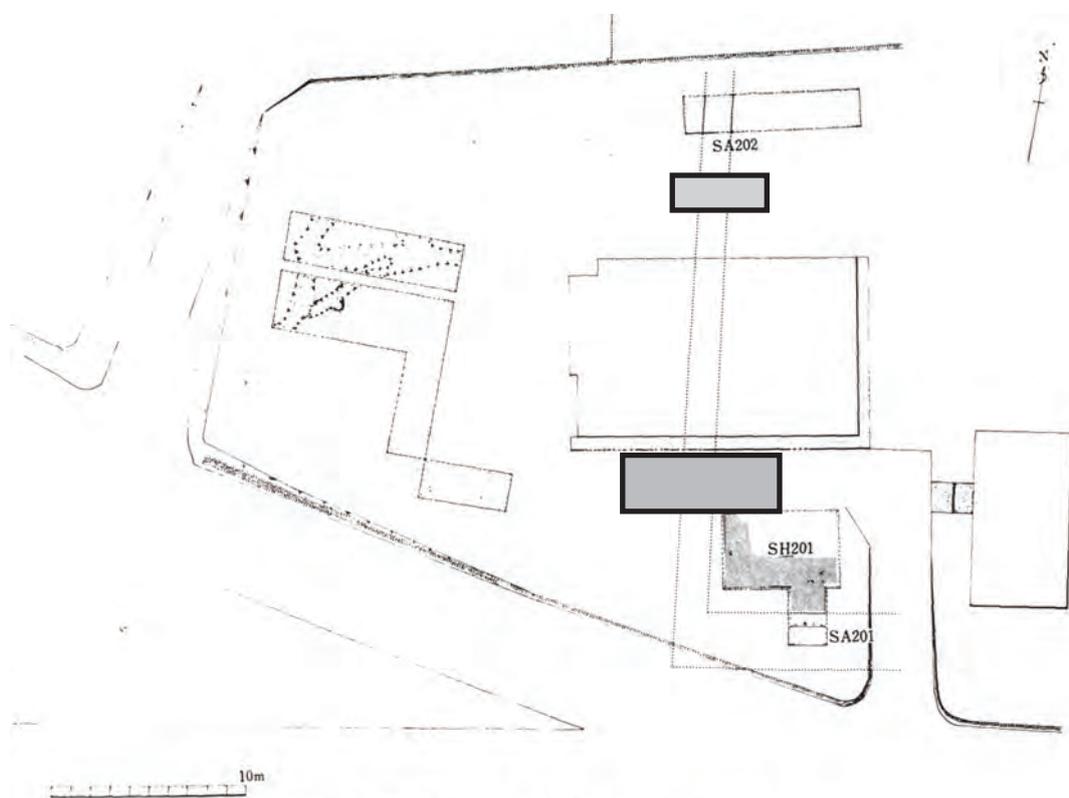


図2 不破関跡推定復元模型（不破関資料館。関ヶ原観光ガイド HP より
<https://www.sekigahara1600.com/feature/fuwa-jinshin.html>）



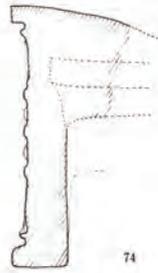
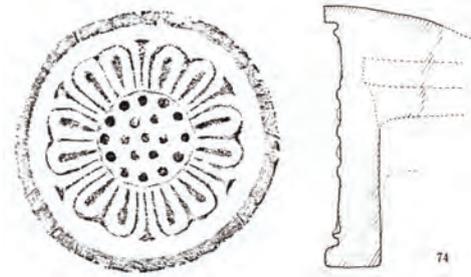
第13図 U地点平面図

図3 不破関築地堀内部の調査（岐阜県教委 1978）

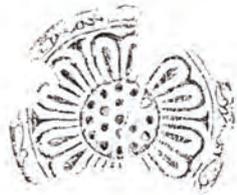


第8図 SA201・SA202・SH201 平面図

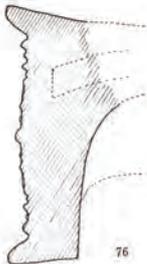
図4 不破関築地堀の調査（トーン貼付部は2023年度発掘調査予定地）



74



75



76

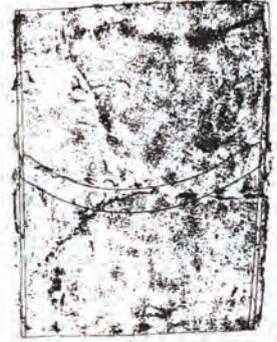


77

第29图 軒丸瓦拓影・実測図 (1:4)



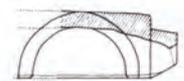
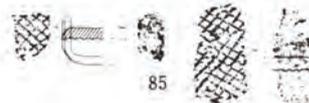
82



83



84



85

86

78

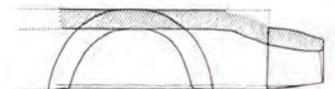
0 10 20cm



79



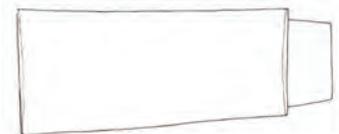
78



80



79



81



80

5cm

第30图 軒丸瓦拓影・実測図 (1:4)

图5 不破関出土瓦 (岐阜県教委 1978) 軒瓦 1:5、丸平瓦 1:8

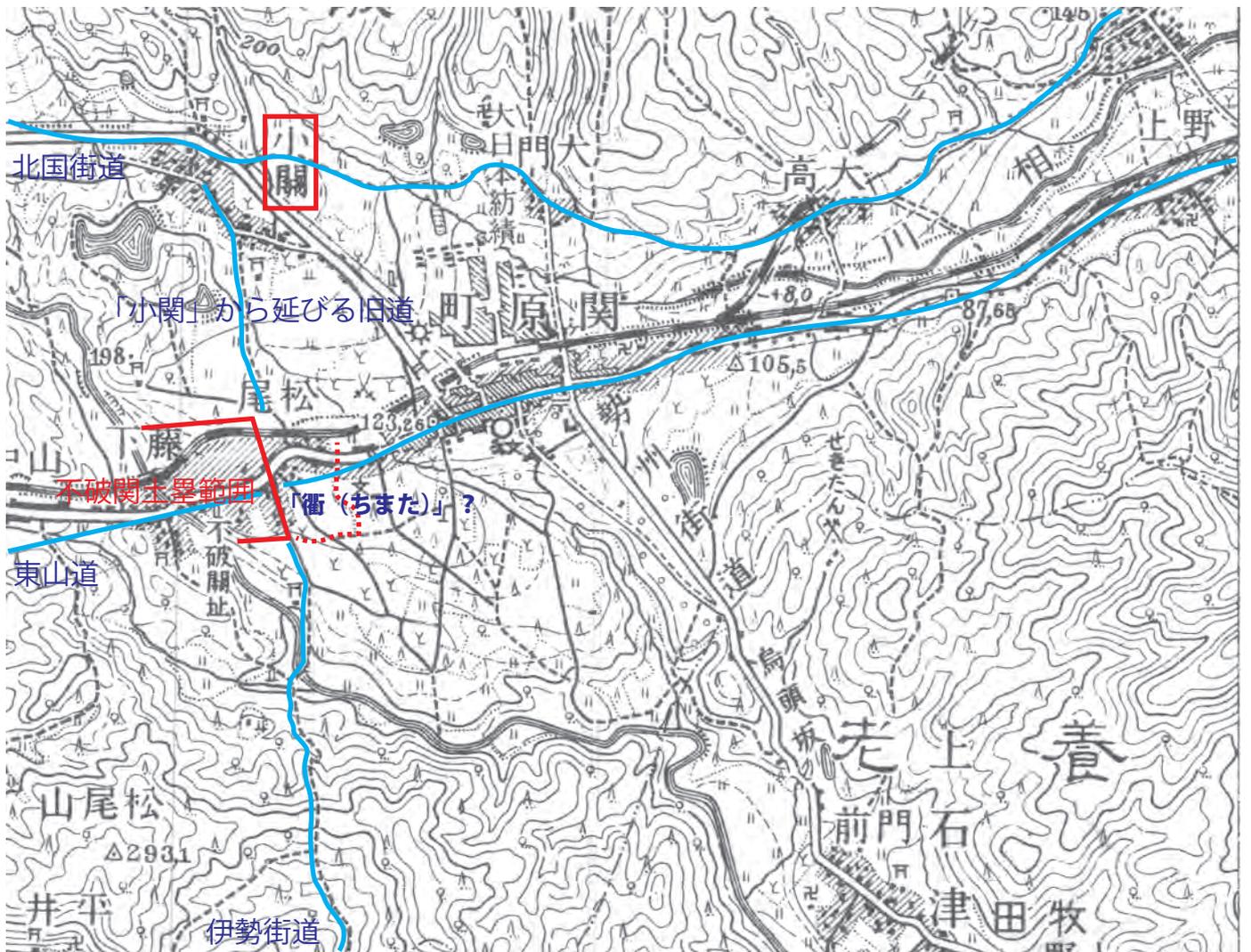


図6 不破関周辺地図 (1:25,000)



図7 不破関東方の須恵器散布 (関ヶ原町分布調査概要報告書より)

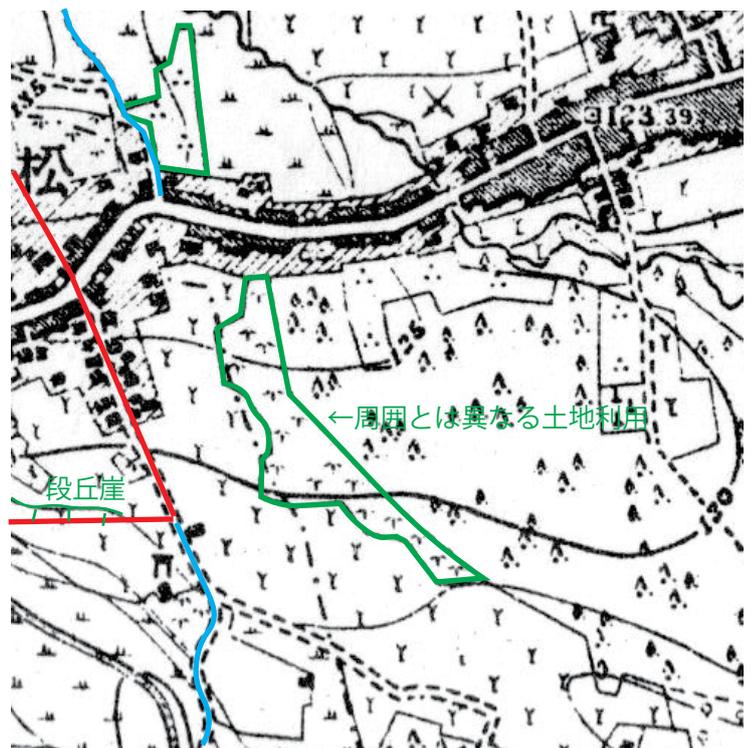


図8 不破関東方の地形と土地利用

不破関・西美濃地域と名古屋大学所蔵史料

古尾谷知浩

はじめに

名古屋大学と西美濃地域の関わりと所蔵史料からみる

一・西美濃地域と高木家

これまでの名古屋大学の取り組み・・・高木家文書の調査研究

不破関で接続する交通路

東山道（現国道二一号）、

長浜へ通ずる道

伊勢へ通ずる道（現国道三六五号）

伊勢街道を南下、旧上石津町（現大垣市）多良・時

関ヶ原合戦直後の慶長六年（一六〇一、異説あり）、高木家が封ぜられる。

高木家Ⅱ交代寄合。木曾三川の治水を担当。

陸上交通の要衝を押さえる。

西高木家陣屋跡Ⅱ史跡指定。北高木家、東高木家の陣屋とともに伊勢街道を挟む。

西高木家文書（重要文化財）Ⅱ現在名古屋大学附属図書館が所蔵。

名古屋大学大学院人文学研究科の石川寛准教授を中心に調査・研究。

地域との連携・研究成果の還元。

二・不破関と固関

今回の研究プロジェクト・・・不破関の調査

日本古代における三関（美濃不破関、伊勢鈴鹿関、越前愛発関（後近江逢坂関））の機能

①通行の遮断

②通行の許可

日常的機能は②通行の許可。国家の管理下で通行させなければ困る。

許可の決裁（Ⅱ「判」は「関司」の権限。

門の通過時に門番がチェックするというイメージは違う。

非常時（朝廷での政変、天皇などの死去・代替わり）に際して①通行の遮断Ⅱ固関。

朝廷での反乱側が軍力を編成するために東国へ脱出するのを阻止。

三関を押さえることが政変の勝敗を左右。

天皇の命を直接国司に下して固関。命令文書＝固関勅符。より重要なのは開関。不正に固関を解除されて突破される方が危険。天皇の命の真正性を確認するための道具＝木契（割札）。

- ① 通行の遮断と② 通行の許可は全く異なる機能。施設も異なる。
- ① 遮断するための関の門が必要。
- 門外に開関使の待機空間が必要。
- ② 関司が「判」を行うための建物＝「庁」が必要。

延暦八年（七八九）三関廃止後にも固関は行われる（所謂薬子の変など）。関司という組織およびその庁を廃止しても遮断施設さえ設ければ固関は可能。

名古屋大学と不破関との関わり

名古屋大学文学部所蔵真継家文書

宝永六年（一七〇九）六月二日固関勅符（整理番号二七一／旧番号二一八一、二二※）

（東山天皇から中御門天皇への代替わり）

延享四年（一七四七）五月一日固関勅符（整理番号五八一／旧番号三一二二※）

延享四年五月四日開関勅符写（整理番号二四五三／旧番号E一―二九※）

（桜町天皇から桃園天皇への代替わり）

※「真継家文書目録」（『名古屋大学古川総合研究資料館報告』一九九七年特別号第六号）

近世には不破関は存在せず。美濃国司も実質的には機能していない。

天皇の代替わりごとに儀礼的に固関、開関を行う。

真継家は美濃国への使者を勤める。固関勅符を所持。開関勅符の写しを入手。

現在名古屋大学の所蔵に帰す。

おわりに

名古屋大学所蔵文書の研究成果を地域に還元。

これまでの高木家文書調査に加え、不破関調査の開始。

参考文献

- 岸俊男「元明太上天皇の崩御」(『日本古代政治史研究』塙書房、一九六六年、初発表一九六五年)
- 柴田博子「鈴鹿関と不破関」(佐藤宗諱編『日本古代の国家と「城」』新人物往来社、一九九四年)
- 館野和己「律令制下の交通と人民支配」(『日本古代の交通と社会』塙書房、一九九八年)
- 永田英明「奈良時代の王権と三関」(今泉隆雄先生還暦記念会論文集刊行会編『杜都古代史論叢』今野印刷、二〇〇八年)
- 永田英明「三関の設置」(広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学Ⅳ軍事と対外交渉』雄山閣、二〇二二年)
- 仁藤智子「固関儀の構造と特質」(『平安初期の王権と官僚制』吉川弘文館、二〇〇〇年)
- 野村忠夫「美濃不破関」(『奈良朝の政治と藤原氏』吉川弘文館、一九九五年、初発表一九七八年)
- 早川庄八「延享四年の固関勅符」(『日本古代の文書と典籍』吉川弘文館、一九九七年、初発表一九九〇年)
- 平林盛得「資料紹介」固関木契」(『書陵部紀要』四、一九五四年)
- 古尾谷知浩「延享四年開関解陣勅符写」(『文献史料・物質史料と古代史研究』塙書房、二〇一〇年、初発表二〇〇二年)
- 古尾谷知浩「国の「庁」とクラ」(『日本古代の手工業生産と建築生産』塙書房、二〇二〇年、初発表二〇一七年)

史料

・延享四年（一七四七）五月一日固閑勅符（桜町天皇から桃園天皇への代替わり）

勅符 正五位下行美濃守藤原朝臣昌全

從五位上守兵部大輔兼権介藤原朝臣資望

応警備事

使從五位上紀朝臣矩弘

内舍人從六位下佐伯朝臣常俊

右来二日避位伝皇太子当此際会疑驚

物聴仍為警固彼国差件人等齎木契

発遣国宜承知依例施行勅到奉行

延享四年五月「一」日 時辰一刻

・延享四年五月四日開閑勅符写

（端裏）延享四年五月四日御讓位開閑解陣 勅符之写

勅 警固美濃国使從五位上紀朝臣矩弘

内舍人從六位下佐伯朝臣常俊

并正五位下行美濃守藤原朝臣昌全

從五位上守兵部大輔兼権介藤原朝臣資望

使 從五位上行兵部少丞中原朝臣清生

内舍人正六位下和氣朝臣武信

右受禪已畢仍為罷警固差件人令齎木契

発遣使国承知依例施行勅到奉行

延享四年五月四日 時辰一刻

函表包銘之
賜美濃国 駅伝

延享四年五月四日時辰一刻

黄紙 請印三所木契壹包以下如固閑 粟津兵部丞清生ヨリ写之

情報技術を用いた文化財の社会活用 ～地域・分野を越えた情報利活用に向けて～

名古屋大学大学院情報学研究科・准教授
遠藤守

○はじめに

本事業 1 年目の取組として、国内における ICT を活用した文化財情報の活用事例について調査するとともに、遺跡見学会への参加（図 1、2022/8/20-21 実施）や関連する国内関連事業の整理を行った。本稿ではそのうちのいくつかを事例と共に紹介する。



図 1. 第 1 回会議および遺跡見学会

○地域・分野を越えた情報利活用の現状と課題

近年、行政を主体としたデジタル化の推進が求められており、各地で自治体 DX（デジタルトランスフォーメーション）推進計画等の策定が進められている。政府による地域情報化施策にはデジタル田園都市国家構想やスマートシティなどの取組があるが、これらの中核をなす施策としてオープンデータの推進が挙げられる。岐阜県は県内オープンデータ推進取組済自治体 100%の達成を早くに実現しているが、他の都道府県同様、その後の展開にはいくつかの課題を抱えているとあって良い。これらの課題は要約すると、1) 地域固有の課題の明確化や、2) データフォーマットの共通化、3) 官民の連携による活用事例の創出、などに課題があると考えられる。これらの課題が解決されることにより、地域・分野を越えた情報利活用が一層実現されると推察する。

○関連研究事例

●デジタルアーカイブ構築に向けた長野県長野市・須坂市における GIGA スクール端末活用

博物館法の改正によりデジタルアーカイブ構築の需要が高まる一方、構築のためのマンパワー不足や費用捻出に向けた課題も多い。本事業では地域の中学生在が GIGA スクール端末活用的一端として、考古発掘作業現場を GIGA スクール端末を用いて記録し、記録データをオープンデータとして公開、その後、県の埋蔵文化財センターの発掘調査成果として活用することで、同課題の解決に向けた試行を実施している。本取組について、考古形態測定学研究会主催の「考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロン」（2022/8/6 実施）にて、「文化財情報を活用する GIGA スクール×文化財・博物館の取組み」と題して発表し、関連研究者との議論を実施した（図 2）。



図 2. 考古学・文化財のための
データサイエンス・サロン

●愛知県一宮市での産官学民連携によるオープンデータ活用

愛知県一宮市にて「国際芸術祭あいち 2022」のデジタルマップを作製した。本事業は一宮市活力創造部博物館管理課が主体となり、デジタル庁が推進するオープンデータ推奨データセット「イベント一覧」を活用する形で実施された。データセットの作成は市役所が行い、可視化システムの構築は大学生が行った(図3上)。本データセットの特徴として、芸術祭事務局による県主催事業のデータと市による県との連携事業、そして市の独自事業の3つを統合している点にある。それぞれの事業内容の記述は独自の公開ライセンスに基づいているが、本データセットそのものはオープンデータに基づく公開がなされている点で情報利活用の意義は大きい。

その後実施された民間主導による「ひつじサミット尾州」では、前述の行政による運営を参考に、同推奨データセットに基づくイベント情報のデータセット作成と可視化システム構築に横展開された(図3下)。前述の芸術祭では一宮市内の会場に留まったが、本事業では一宮市のほか、岐阜県羽島市、愛知県津島市の3自治体を跨ぐ会場のイベント情報の掲載を実施した。

(参考サイト) <http://idea.linkdata.org/idea/idea1s3498i>

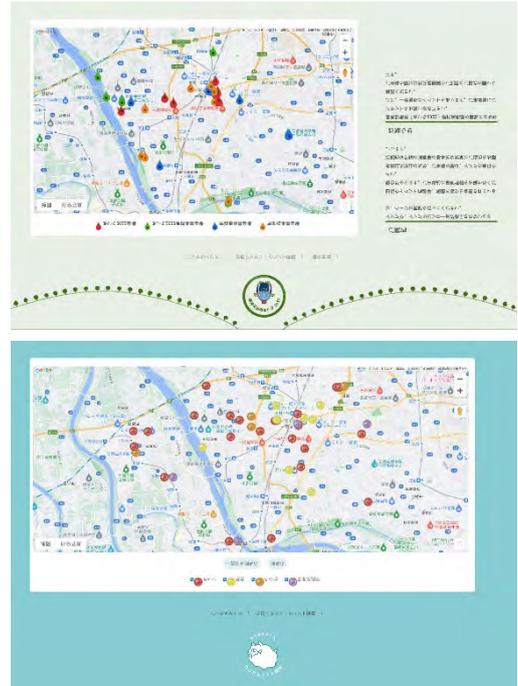


図3. 国際芸術祭あいち 2022 (上) とひつじサミット尾州 (下)

●岐阜県飛騨市における官民連携による考古民族館の活性化

飛騨市の飛騨みやがわ考古民俗館では、官民連携による「石棒クラブ」の取組が目目されている。本取組みにおいて、行政である飛騨市役所では教育委員会と総務部管財課情報システム係が連携し、官民連携によるオープンデータの取組として、同クラブが収集・デジタル化したデータのオープンデータ化を通じた考古民俗館の活性化方法について模索を行っている。本取組の主体となる石棒クラブは、飛騨みやがわ考古民俗館を舞台とした地方創生を目指す様々な試行を実施しており、中でも考古発掘資料の3D化とその活用について、国内研究者らと交えた議論の場を設ける(2022/11/19-20実施)など積極的に活動を行っている。



図4. 石棒クラブ3D合宿の様子

○今後の展望とむすびにかえて

本事業において、不破関に関わる地域が連携しつつ文化・教育・観光等各分野において ICT を活用した様々な施策を実施することが重要であると再確認した。これら施策の実施にあたり、オープンデータ推進等の ICT 施策を地域の行政や学校・地域コミュニティと伴走し推進することが、当該地域の活性化に一層寄与するものとする。次年度においては今年度得た調査結果等に基づき、各市町において具体的な成果を創出してゆきたい。



発行日 2023年3月11日

発行 名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町